

当所図書を紹介

第 52 回 技術 図書 (和・洋書)

(著 者 名)	(書 名)	(出 版 社)	(出版年月)
梅卓忠夫 金田一春彦 阪倉篤義 日野原重明	日本語大辞典 カラー版	講談社	1989年11月
小口 高 神沼克伊 川口貞夫 星合孝男	理科年表読本 二つの極 北極・南極からのメッセージ	丸善	平成元年 3 月
ジオグラフィックス・ ジャパン編集委員会	理科年表読本 ジオグラフィックス・ジャパン	丸善	平成元年11月
荒牧重雄 長岡正利 白尾元理	理科年表読本 空から見る日本の火山	丸善	平成元年11月
内田 治	統計実務のためのロータス 1-2-3 活用法	日本経済新聞社	1989年10月
戸内順一	マグロウヒル逆引きシリーズ 逆引き P1. EXE	マグロウヒル出版	1989年10月
西澤紀昭 上村克郎	コンクリートの施工 —RC 示方書と JASS 5 の比較・解説—	技術書院	1989年 4 月
C. J. Wilshere	FORM WORK	Thomas Telford	1989年
P. Schiessl	Corrosion of Steel in Concrete (RILEM REPORT)	Chapaman and Hall	1988年
G. S. T. Armer J. L. Clarke F. K. Garas	The Life of Structures Physical Testing	Butterworths	1989年
土木学会岩盤力学 委員会	第22回岩盤力学に関するシンポジウム講演論文集	土木学会 岩盤力学委員会	1990年
土木学会	土工工学ハンドブック(I), (II)第4版	技報堂出版	1989年11月
日本トンネル技術協会	トンネル新技術に関する海外文献集(別冊) 昭和57年度版 —各国トンネル構造設計の比較— (日本鉄道建設公団青函建設局委託)	日本トンネル技術協会	昭和58年 3 月
日本トンネル技術協会	トンネル新技術に関する海外文献集 昭和59年度版 —NATM・吹付けコンクリート・計測・その他— (日本鉄道建設公団青函建設局委託)	日本トンネル技術協会	昭和60年 3 月
日本トンネル技術協会	NATMにおける二次覆工の設計施工に関する調査 研究報告書 (日本国有鉄道大阪工事事務局委託)	日本トンネル技術協会	昭和58年 3 月
日本トンネル技術協会	NATMに関する海外文献集 海峡連絡鉄道の技術に関する文献資料調査報告書(別冊) (日本鉄道建設公団青函建設局委託)	日本トンネル技術協会	昭和59年 3 月
日本トンネル技術協会	NATMに関する海外文献集(続編) 海峡連絡鉄道の技術に関する文献資料調査報告書(別冊) (日本鉄道建設公団青函建設局委託)	日本トンネル技術協会	昭和60年 3 月
日本トンネル技術協会	第7回山岳トンネル技術シンポジウム —NATMの補助工法—	日本トンネル技術協会	昭和62年 6 月
日本トンネル技術協会	トンネルに関する文献目録(I)	日本トンネル技術協会	昭和60年 7 月
日本トンネル技術協会	NATMの計測指針に関する調査研究報告書	日本トンネル技術協会	昭和58年 3 月
日本トンネル技術協会	第15回施工体験発表会 —悪条件下の NATM—	日本トンネル技術協会	昭和59年11月
日本トンネル技術協会	トンネル掘削によるゆるみ領域の調査報告書 (関西電力株式会社委託)	日本トンネル技術協会	昭和57年 3 月
大森豊明	監視制御システム実用便覧	フジ・テクノシステム	平成元年 8 月
Wilhelm Manns Bernd Neubert 他	DEUTSCHER AUSSCHUSS FUR STAHLBETON HEFT 403	Beuth Verlag Gmbh	1989年
Harald Budelmann	DEUTSCHER AUSSCHUSS FUR STAHLBETON HEFT 404	Beuth Verlag Gmbh	1989年
運輸省地域交通局	都市交通年報 平成元年版	運輸経済研究センター	平成 2 年 1 月

(著者名)	(書名)	(出版社)	(出版年月)
篠邊三郎	頭首工の魚道 上巻 現状編	笹野印刷	平成元年 1月
土木学会水理委員会	水工学論文集 第34巻	土木学会	平成2年 2月
北海道開発局	第33回(平成元年度)北海道開発局技術研究発表会 講演概要集 (1)共通/建築機械部門 (2)道路・舗装/橋梁部門 (3)河川/ダム・砂防部門 (4)農業/港湾・漁港・空港部門	北海道開発協会	平成2年 2月

当研究所図書室利用者のため、入手図書の紹介については、本紙1982年8月 No. 351 に定期技術と雑誌として紹介したのを初めに、その後隔月ごとに紹介を重ね、前回(1990年12月 No. 451)までで51回を数えております。

(扱 企画調整課情報管理係)

サ □ ソ

## 両 刃 の 剣

土木学会誌1989年9月号に「土木」という名称を継続使用するという答申が掲載されている。その中に、「土木技術は、社会の根幹を形成し、伝統から先端にまたがる科学技術を駆使して人類の生活の向上と文化の形成を計り、環境を保全するための壮大な技術体系である。」とある。英国土木学会によれば、土木技術とは「自然の力の偉大な源泉を、人類の有用と便利さのためにふりわける技術 (art)」であるという。

ピラミッドや万里の長城などの巨大構造物、モヘンジョダロの下水施設やローマ帝国のアッピア街道、スエズ運河とパナマ運河。日本に目を向ければ、仁徳天皇陵などの巨大墳墓、信玄堤などの多くの堤防、疎水、隧道、橋、道路。それらをつくったのは土木技術なんだから、土木が社会の根幹を形成してきたというのは過言ではない。

何ともはや、土木というものは凄いのだと思うのだが、それにしては一般の方々の反応が今一つだという気がする。それどころか、土木屋は開発という名目で地球を破壊している、いう意見すらある。

バングラディッシュ。国全体は、ガンジス、ブラマプトラ、メグマの三大河川がヒマラヤから運び出す砂や泥が積もってきた沖積平野の三角洲にある。これら三大河川の流域には、インド、ネパール、ブータン、中国がある。それぞれの国が、開発という名で自然を荒廃させたことが原因で、最も下流にあるバングラディッシュが大洪水に遭遇するハメになる。というのはマスコミの意見だが、上流域の開発を担ったのは土木屋だとすれば、崇高な理念に基づく「土木」は、見掛けだけになる。一年ほど前の本欄で述べたボルネオ島のサラワク地方の木材搬出のために作られたジャングル内の道路が、土木屋の片割れの作ったものとすれば、ベナン族の生活を破壊した責任の一端は土木屋にもある。

建設と破壊は両刃の剣。振り回す方向によっては自然の破壊、強いては人類の破壊を招く。美しさとは現在の姿、あるがままの姿、とすれば、所詮土木はイニシエよりあるがままの自然景観を破壊し続けてきたことになる。だが、しかし、But である。自然主義は必ずしも人類の幸福を招くとはいえない。氾濫する河川をそのままにして良いだろうか。デコボコの曲がりくねった狭い道で良いだろうか。向う岸までイカダでいくか。山を越えて隣町まで行くか。天変地異には神に祈るのか。

要は、両刃の剣の振り回す方向をよく考えねばならない、ということだ。「人類の生活の向上と文化の形成を計り、環境を保全するための」土木であるかどうか、よく考えてみようではないか。

(記 能登繁幸)